

## 論文の和文要旨

論文題目

日本語学校非常勤講師の職業継続の要因  
—キャリア・アンカー（選択により見えてくる職業の価値）に注目して—

氏名

畠山浩子

本研究は、日本語学校教師のうち大多数を占める非常勤講師、中でも長い経験を持つ教師を対象に、「日本語教師は食べていけない」と言われるような厳しい待遇の中で、日本語教師を続けている要因を、「キャリア・アンカー」という概念に注目し、教師のこれまでの経緯の語りから探るものである。

日本語学校の学生(以下「日本語学校生」)は、日本語学校修了後に日本の高等教育機関に進学することを目的とすることが多い。つまり、日本語学校が、日本の大学等の高等教育機関に在籍する私費留学生の留学経路の一部になっているということである。このことは、政府の留学生政策に関する提言でも盛り込まれている。また、日本語学校は外国人学生を受け入れていることから、入国管理政策とも密接に関連している。このように日本語学校が国の政策と大いに関連がある一方で、日本の学校教育制度の枠外にあるため、日本語学校修了が学歴とは認められない、日本語学校教師には免許がないなど、日本人が通う学校とは様々な点で異なっている。

日本語教師については「留学生受入れ 10 万人計画」策定以降、日本語教師の量的拡大と質的向上を目的とした教員養成に関する提言に基づき、高等教育機関での教員養成課程の設置、日本語教育能力検定試験の実施がなされてきた。教員養成に関する提言は、日本語学校教師に限ったものではないが、日本語教師養成講座の内容や日本語学校応募時の条件などに提言の内容が反映されている。

留学生政策においては日本語教育が欠かせないものであるが、その日本語教育を底辺で支えているのが日本語学校だと言っても過言ではない。しかしながら、日本語学校は国の政策や時には震災や不況などの社会的状況の影響も大きく受ける不安定な職場であり、待遇が悪いとも言われている。このような中で、日本語学校の非常勤講師を続けているのはなぜか、これが本研究の出発点であった。

1 章では、研究の背景、研究目的と研究設問、本稿の構成を述べた。背景として、日本語学校と日本語学校教師の概要、日本語学校生あるいは日本社会から見た日本語学校の位置づけを述べた。研究目的は、日本語学校非常勤講師の職業継続の要因を探ることであり、そのための研究設問として、日本語学校非常勤講師の語りから見えるこれまでの経緯と選択、選択の理由から読み取れる日本語教師像とその形成過程及び要因、社会的な日本語教師像と非常勤講師の語りから見える日本語教師像との差異の 3 点を明らかにすること、とした。

2 章では、日本語学校を取り巻く状況として、日本語学校の現状と日本語学校が置かれている背景をまとめた。現状として、日本国内の日本語学校の、学校数、教師数、学習者数を示し、近年はこれ

らが増加傾向にあるものの最近 10 年間ではほぼ横ばいであること、日本語学校の設置形態としては株式会社が多く、日本語学校修了生の進路としては 7 割以上が進学、その進学先は 6 割が専門学校、3 割が大学や大学院等であることを示した。また、日本語学校の設置基準や、日本語学校の専任講師と非常勤講師の職務内容の違い、日本語学校教師募集の条件、日本語教師養成講座の概要を示した。次に、日本語学校が置かれている背景として、国の留学生政策、入国管理政策、日本語教師に関連する政策提言、日本語学校の設置に関連する政策提言を提示した。日本語学校非常勤講師の職業選択に、留学生政策等の国の政策が密接に関連しているからである。そして、日本語学校が国の政策に影響を受けている一方で、日本語学校教師についての言及がほとんど見られないことを指摘した。

3 章では、日本語学校、日本語学校教師、日本語学校と各種政策との関わりについての先行研究を概観した。日本語学校については、その概要と悪質な日本語学校が社会問題化した後の設置基準の制定や審査認定、及び現状の問題点を示した。日本語学校教師については、教師の資質、日本語教師養成、日本語学校教師を対象とした研究、日本語教師像に関する調査をまとめた。これらの研究からは、国の政策提言を契機とした日本語教師養成に関する施策が実施され、日本語教師の量的拡大、質的向上が見られる中、養成の段階から日本語教師としての勤務段階までのそれぞれの段階における問題点、中でも日本語学校非常勤講師の厳しい待遇を指摘するものがみられた。一方で、日本語教師へのインタビュー調査や、一般的な、あるいは日本語教育分野における日本語教師像についての研究、国の政策との関わりについての研究などでは、日本語学校非常勤講師に絞った言及はみられなかった。

4 章では、分析的枠組みとして、シャイン (1991) の「キャリア・ダイナミクス」および「キャリア・アンカー」という概念、本研究で注目した「キャリア・アンカー」と質的研究の関係、質的研究採用の理由についてまとめた。シャインのいう「キャリア」とは「人の一生を通じての仕事」を意味し、「キャリア・ダイナミクス」とは、人は仕事だけでは生きられず、仕事、家庭、自己自身の相互作用があるという概念である。また、「キャリア・アンカー」とは、異なる環境に入る、選択に直面するなどの時に初めて見えてくる職業についての関心や価値、としている。日本語学校非常勤講師は、その経験の中で社会的状況や家庭の事情に影響を受けながら、自身の職業についての関心や価値「キャリア・アンカー」に基づき、様々な選択をし、その時点での日本語教師像を形成し変容させている。その変容、そして長く日本語教師を継続している要因を捉えるためには、その経験を詳細に語ってもらい、それを質的に分析する必要があると考え、質的研究法を採用した。

5 章では、調査協力者、調査協力者とのラポール、分析方法、分析手順をまとめた。調査協力者は日本語教師歴 15 年以上の 3 名の日本語学校非常勤講師である。3 名は現在でも筆者と同じ日本語学校に勤務しており、良好な人間関係、ラポール (信頼関係) のもと、これまでの経緯を詳しく語ってもらうことができた。3 名に対して半構造化インタビューを実施し、インタビューデータをもとに経緯の視覚化と文章化、選択の理由の分析と考察、日本語教師像及び日本語教師像を特徴づける項目の抽出の 3 段階を分析方法として、それぞれの具体的な手順を示した。

6 章から第 8 章では、第 5 章で示した分析方法及び分析手順に則り、分析結果及び考察を記した。

6 章は、分析結果 1、秋山先生の場合である。秋山先生の経緯や選択の理由の分析・考察から見えてきたキャリア・アンカーは、「専門知識は必要だがシリアスではなく、普通とは違う職場であり、

勤務条件の希望が受け入れられる」というものであり、日本語教師像は「専門性をもった仕事であると同時に、勤務条件を自分で調整できる自由度の高い仕事であり、経験が長くなるほどその自由度が大きくなる仕事」であった。

7章は、分析結果2、石川先生の場合である。石川先生のキャリア・アンカーは「自分の興味関心の満足度と仕事の自由度」であり、日本語教師像は「待遇は不十分でも、授業の進め方が比較的自由にできる場合があり、養成講座の講義にも役立つ知識・能力・経験が身につく、おもしろい仕事」であった。

8章は、分析結果3、内田先生の場合である。内田先生のキャリア・アンカーは「自分のペースを守り、言葉を通して教え、支援すること」であり、日本語教師像は「自分のペースで仕事ができ、時には希望に合う学校を選ぶなどして、長く続けることができる」仕事であった。

9章では、総合考察として、研究設問に答える形で分析結果及び考察を述べた。研究設問①の日本語学校非常勤講師の経緯については、分析結果の各章の「選択の理由の分析・考察」にまとめ、共通的に見られた経緯を述べた。研究設問②については、3名の日本語教師像から「日本語学校非常勤講師像」とも呼べるものが抽出でき、それぞれの教師像に影響を与えた要因について考察を行った。日本語学校非常勤講師を続けている大きな要因としては、「勤務条件の選択の自由」があること、また経済的な余裕も要因の一つであることを指摘した。研究設問③については、社会的に考えられている日本語教師像と設問②で抽出した「日本語学校非常勤講師像」を比較し、共通点としては「専門性」と「待遇の悪さ」があったが、「日本語学校非常勤講師像」に見られた「勤務条件の選択の自由」などはないことを指摘した。また、社会的に考えられている日本語教師像は「日本語教師の入り口としての基準」や「理想像としての日本語教師像」であり、日本語学校教師の多くはそのどちらでもなく、これまで国の提言等では関心が払われてこなかったことが示唆された。

10章では、本研究の結論、意義、課題、及び今後への若干の提言を述べた。結論として、日本語学校非常勤講師が職業を継続している最大の要因が「勤務条件の選択の自由」であり、待遇的には不満がありつつも、仕事としては満足を感じており、このような「専門性を持ったパートタイム」に日本語教育界が底辺で支えられていること、その一方で、国の政策では非常勤講師は見過ごされていること、を述べた。意義として、これまで研究対象とされてこなかった日本語学校非常勤講師に焦点をあてたこと、語りの分析方法、特に時間の流れの中で経緯を捉える場合の方法の提示、さらに、国の提言等社会的な日本語教師像と多くの非常勤講師が抱く日本語教師像との乖離を指摘できたことをあげた。課題としては、調査協力者が限られていたこと、調査協力者の語りを十分に生かし切れなかったこと、分析方法の妥当性の検証をあげ、最後に、留学生政策を今後も推進していく上では、日本語学校の存在は無視できず、日本語学校及び日本語学校教師の質の向上は今後もより一層求められること、日本語学校非常勤講師の待遇を含めたステップアップのための施策の必要性、現在でも問題のある日本語学校が存在していることへの関心の必要性などについて述べた。